

DXとは、Digital Transformationの略語で、Xは、「Trans」を意味する。簡単に言うと「ITの活用により、ビジネスモデルや組織を変革すること」だそう。

コンプライアンス、ガバナンス、ダイバーシティ、サステナビリティに続く、次の新たな刺激がDXであり、IT化との違いは、それを手段とした変革の推進にある。

グローバルズム下のビジネス展開には、どうしても変化を促す新しいプロバガンダが必要なようだ。そして、なぜか日本はそれを後生大事に信仰してしまう。

日本国憲法に至っては74年モノの外來ヴェンテージだが、未だその存在感は絶大だ。「不磨の大典」と「DX」、一見何の共通点もなさそうだが、実は両者の根底には、日本人の「お人好し」がある。

外來モデルに対し、問題意識もなく、嬉々として受け入れてしまう「お人好し」、悪意や敵意の存在をスルーして、人類みな兄弟という「お人好し」…。

こんなモノを純真に受け入れ、信奉することで、国民の平穩は本当に守れるのか？

グローバルスタンダードは、常にダブルスタンダードであり、標準国家ならば、当然のように本音と建前を使い分け、自国の国益を最優先に厳しい外交を仕掛ける。

つまり、グローバルズムを純粹無垢に受け入れる「お人好し」は、その功罪の「罪」を一手に引き受けることになりかねない。

戦力を放棄する善意に、果たして国際社会は善意で応えてくれるだろうか？

DXにご用心!

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

サイバー空間の油断と善意は、世界中の悪意と攻撃に耐えることができるのか？

サイバー攻撃や電磁パルスに対し、備えも意識も脆弱なままならば、with X「trans」の未来は万死を迎えることになる。狡猾な悪意が情報をかすめ取り、獐猛な敵意は通信・交通といった社会基盤を破壊し、蓄積したデータをも一瞬にして消去してしまう。

ビジネスと政治（外交）は別だ、と思いつまされた戦後の日本人は、アメリカ商店街の傘の下で、豊かな経済を謳歌してきた。少しづつ痛い目に遭いながらも、未だ自分だけは善意の第3者であり続けたい！と幻想に縛られている。

憲法の前文は、その無責任な覚悟を国民の意識に刻み込んだままだ。

ビジネスと政治、つまり、経済と外交（軍事）は表裏一体であり、グローバルズムの名のもと、ビジネスに仕掛けられた巧妙な罠に對しては、常に警戒心を忘れてはならない。知らない間に、国民の個人情報全てを盗まれ、忍び込んだウイルス一つが国の防衛システムまでも狂わせてしまう。

さて、少々ビビり過ぎたCOVID-19：感染症ウイルスの脅威は痛いほど懲りたであろう。しかし、社会基盤を蝕む悪意のウイルスは、他にも沢山ある。

便利だから？ 効率的？ 持続的？…

グローバルズムの流れの中、跋扈する悪意の激流Xに溺れないよう、くれぐれもご用心！



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に「概説戦後学校教育」「武徳教育のすすめ」。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価 700円
Amazonにて販売中